

## 乳幼児期の発達保障と児童発達支援の課題

## 「安心」「楽しい」「大好き」を大切にした療育

「ほんとはやりたい」思いとつながる

安藤 史郎

## 1 そうた君のこと

笑顔がとびきりかわいく、特別支援学校に進学したそうた君。これからどんな世界を広げていくのか楽しみで仕方がない。

さかのぼること7年、乳児後期健診（10ヵ月）では、「ちょうだい」に対して持っているものを渡すことはせず、人見知りもなかった。1歳半、その後の経過観察の健診では、丸棒を孔に入れる容易な課題をくりかえし、角板の向きを変えて孔に入れる課題箱の「角板」や「はめ板回転全」といった対象にあわせて“こうかな？それともこうかな？”と調整を要する課題はできなかった。他者の意図やモノに対して、自分の気持ちや行動を調整することに苦手さがあったのだ。お母さんは「言葉は通じているが発する言葉が少ない」「言葉を言わなくなった。いつものパターンを崩されるのがいやで、かんしゃくをおこすと立ち直れない」と述べていた。自分の表現でなぜ伝わらないんだろう、意図を含んだ関わりや変化を受け取めづらく気持ちや行動をうまくあわせていけないといったもどかしさを感じ始めていたのではないか。その後、市の親子教室を経て2歳児の年度途中であかつき・ひばり園に通うこととなった。

## ●どきどきの園生活のスタート～親子クラス

新しい人や場所が苦手な、部屋にも入りづらい、給食も食べられないことがあった。お母さん

と分離の時は泣いており、抱っこをさせてくれない。お母さん以外のおとなが安心できる存在にはなっていなかった。しかしやがて、担任が関わると少しずつ近づいてきたり、「おいでー」と手を広げると身体を預けてくれたりすることもあり、そんな姿をお母さんと喜んだこともあった。このころ興味があったのは紙をやぶくことで、担任と一緒に紙をやぶくことに付き合っていた。

## ●園の生活に慣れてきた3歳児ぺんぎんクラス

おとなと正面で向き合って関わることはいやで、あまり人と交わらずに遊んでいた。描画は自分からは描かず、担任が描いた好きなキャラクターをちぎり抜いて持っていた。初めてのことは苦手だったが、次第におとなや友達の様子を見て遊びに参加するようになってきた。少しずつ担任に気持ちを寄せるようになってきたぺんぎんクラスでは、好きなことを支えにして、“楽しい”という思いを積み重ねることを大事にした。

## 2 安心・信頼を生活の軸にした4歳児ばんだクラスの取り組み

筆者はばんだクラスでそうた君を受けもった。クラスは、4歳児11人に新入園の3歳児2人を加えた13人。クラスの目標は「子どもたちそれぞれの手応えを大事にして、わくわくを膨らませ、要求の主人公に」。1年を通して植物や虫を育て、「おとなに準備してもらえばかりではない生活にしたいね」ということで、テーマは「命を育み、自分たちで生活をつくらう」だった。

そうた君は、2年間の園での生活を経て、“○

○したい” “いや”という思いは膨らんできていたが、それを言葉でうまく伝えることができない。いやなことがあると「ふぁー！」とからだをのけぞらせて怒る。お父さんもお母さんも「何がしたいのかわからへん」と困っていたが、そうた君も思いを伝えることができずに困っていた。みんなが遊んでいる時には部屋のすみにいることが多く、自由遊びの時間にはホールを走り回っている。不安が高く、人に関わられるのは苦手な、特に男性職員が苦手。近寄るだけで声をあげて逃げていく。

4月、何が好きでどのようなことに困難さを感じているのか、まずはそうた君が感じている世界を訪ね、関係づくりの時期。ホールでの自由遊びでは、巧技台や平均台にちょこちょこつとのはつてはすぐに降りて走って…また遊具にちょこつとのはつては走って、遊具に乗って見せて誘いかけても関心がない。初めて出会うそうた君となかなか一緒に遊ぶことができない日が続いた。どうやって一緒に遊ぼう…。クラスには、たかいたかいたが好きな子が多くいた。関係づくりにはダイナミックな遊びだ！と他の子と同じようにそうた君にも…と近づいていく。すると怯えたように「ふぁー！」と逃げていく。一方、昨年のクラスでは自分から食べないみそ汁も食べさせると食べる、きらいな歯科の部屋に泣きながらもお母さんについて行く、おとなの関わりをいやがる反面、いやいやながらもやってしまうという一面もあった。

そんな矛盾した姿から、させられることはやるけれども、“おとなからの関わりっていいもんだな”、そんな安心感がもてずにいるのではないか、おとなとの関係が「させられる関係」にならないようにしよう、とクラスで話し合った。

## ●“楽しそう…気になる” ひそかな思いを拾い、タイミングを大切に

【エピソード1】大事にしたい方針はクラスで一致していたが具体的な関わりの糸口を見つけられずにいたある日、寝転んで子どもを足に乗せる「飛行機」を他の子にして遊んでいた。すると、いつもは部屋のすみにいるそうた君も近くに寄っ

てきた。通りかかっただけかな、と思っていたが、明らかに近づいてきている。もしかして飛行機が気になるのかな。そこで、寝転んだまま手を広げて「おいで」と誘うとちょこちょこつとやって来た。“え、来るんだ”と誘った自分が驚きながらも、この機会を逃さないように、そーっとバランスを気にしながら持ち上げるとうれしそうなそうた君。男性職員との接触、しかも不安定な姿勢を楽しむんだ！よければ私はくり返しやろうとするがそれはいやだったようで、飛行機から降りて離れて行く。ああ、でもあの笑顔の裏にはまたやりたいという気持ちがきつとあるはず。誘おうとする意図があまり見え見えにならないように、他の子たちといつもよりおおげさに楽しそうに遊んでいると、それを見てまた寄ってくる。ちょつとやっってはまた離れ、こちらが欲を出すと来ず。

友達の様子をちらっと見ていて“やりたい”思いをもっていること、くりかえしにはならなくても短い単位で“楽しい”を共有できること、おとなが寝転んだ姿勢だと心理的な抵抗感も少ないこと、関わりのきっかけが少し見えた気がした。

【エピソード2】新ホールで遊んでいたある日、巧技台に渡したはしごをちょこちょこつと歩いては降り、新ホールをとこ狭しと走っているそうた君。今日もなかなか遊具に向かわないなあと思っていると、ふとした瞬間に、空いている吊り遊具に乗りに来た。しかし、乗りに来た遊具はバンジーと呼ばれる、ゴムでできたなかなか座りにくい遊具。近くにいた先生は突然のことにそうた君を支えながら座りやすいようにバンジーを調整できず四苦八苦。その間5秒ほど。結局座れずに離れてしまった。ああ、行ってしまった。落胆する担任たち。その日の振り返りで、やりたい思いはあるけれど、高さや揺れのある遊具でうまく遊べず、できなくても粘ってまでやろうとしなかったのかな、と話し合った。

【エピソード3】給食の時間も部屋のすみにいることが多いそうた君。かと思うとイスに座って食べることもある。なんでだろう。部屋の外での活